

ニュートン法の一般化

堀 口 俊 二

2013年2月

新潟産業大学経済学部紀要 第41号別刷

BULLETIN OF NIIGATA SANGYO UNIVERSITY
FACULTY OF ECONOMICS

No.41 February 2013

ニュートン法の一般化

Generalization of Newton's method

堀 口 俊 二
Shunji HORIGUCHI

要旨

§1 はニュートン法を拡張して一般漸化式（拡張ニュートン法）を与える。§2 はその収束条件式を与える。§3 は拡張ニュートン法の例を与える。

1. ニュートン法の拡張

定義1 $f(x)=0$ の根を近似するための漸化式

$$x_{k+1} = x_k - \frac{f(x_k)}{f'(x_k)} \quad (k=0,1,2,\dots)$$

をニュートン法 (1669 年頃ニュートン, 1690 年頃ラフソン) という。

ニュートン法を変数変換により拡張する。関数 $y=f(x)$ に対して, $x=\varphi(u)$ とおく。

$$y=g(u) := f(\varphi(u)) = f(x)$$

により関数 $g(u)$ を定義する。 $y=g(u)$ にニュートン法を行う。

$$\begin{aligned} u_{k+1} &= u_k - \frac{g(u_k)}{g'(u_k)} \\ &= u_k - (\varphi'(u_k))^{-1} \frac{f(x_k)}{f'(x_k)}, \quad x_k = \varphi(u_k), \quad \left(\frac{d\varphi}{du}\right)^{-1} = \frac{du}{dx} \end{aligned}$$

となる (林 [3])。 $x_k = \varphi(u_k)$ すなわち $u_k = \varphi^{-1}(x_k)$ より, 次の定理の漸化式を得る。

定理 2
$$\varphi^{-1}(x_{k+1}) = \varphi^{-1}(x_k) - (\varphi'(\varphi^{-1}(x_k)))^{-1} \frac{f(x_k)}{f'(x_k)}$$

これは $x_k = \varphi(u_k) = u_k$ のときニュートン法となる。

定義 3 定理 2 の変数 x_k の漸化式を拡張ニュートン法あるいはニュートン法の一般漸化式という。

2. 拡張ニュートン法（一般ニュートン法）の収束

§1 で定義された $y=g(u)$ に関するニュートン法は

$$u_{k+1} = u_k - \frac{g(u_k)}{g'(u_k)}$$

である. $f(\alpha)=0$ とすると, $g(\varphi^{-1}(\alpha))=f(\alpha)=0$ となるから, $\varphi^{-1}(\alpha)$ は $g(u)=0$ の根である. このときニュートン法の収束に関して

$\varphi^{-1}(\alpha)$ が単根のとき

$$|u_{k+1} - \varphi^{-1}(\alpha)| \doteq \left| \frac{g''(\varphi^{-1}(\alpha))}{2g'(\varphi^{-1}(\alpha))} \right| (u_k - \varphi^{-1}(\alpha))^2$$

となり, 2次収束する. $\varphi^{-1}(\alpha)$ が m 重根のとき

$$|u_{k+1} - \varphi^{-1}(\alpha)| < \left(1 - \frac{1}{m}\right) |u_k - \varphi^{-1}(\alpha)|$$

となり, 1次収束する. 2つの式を $x_k, f(x_k)$ に書き直して次の定理を得る.

定理 4 漸化式 $\varphi^{-1}(x_{k+1})$ は, $\varphi^{-1}(\alpha)$ が単根のとき

$$|\varphi^{-1}(x_{k+1}) - \varphi^{-1}(\alpha)| \doteq \left| \frac{f''(\alpha)(\varphi^{-1}(\alpha))^2 + f'(\alpha)\varphi''(\varphi^{-1}(\alpha))}{2f'(\alpha)\varphi'(\varphi^{-1}(\alpha))} \right| (\varphi^{-1}(x_k) - \varphi^{-1}(\alpha))^2$$

となり, 2次収束する. $\varphi^{-1}(\alpha)$ が m 重根のとき

$$|\varphi^{-1}(x_{k+1}) - \varphi^{-1}(\alpha)| < \left(1 - \frac{1}{m}\right) |\varphi^{-1}(x_k) - \varphi^{-1}(\alpha)|$$

となり, 1次収束する.

3. 3つの例

例 1 q を 0 以外の実数定数とする. $x = \varphi(t) = t^{1/q}$ とおくと, $t = \varphi^{-1}(x) = x^q$ であるから, 拡張ニュートン法は

$$\begin{aligned} x_{k+1}^q &= x_k^q - (\varphi'(\varphi^{-1}(x_k)))^{-1} \frac{f(x_k)}{f'(x_k)} \\ &= x_k^q - \frac{dt}{dx} \frac{f(x_k)}{f'(x_k)} \\ &= x_k^q - qx_k^{q-1} \frac{f(x_k)}{f'(x_k)} \end{aligned}$$

となる。これを土倉・堀口 (TH) 法という。とくに $q=1$ のときニュートン法となる。

TH法の収束を与える。

定理 5 α を $f(x)=0$ の根, $q(\neq 0)$ を整数定数とする. $x_n \rightarrow \alpha$ のとき, TH法は, α が単根のとき次の 2 次収束をする.

$$|x_{n+1}^q - \alpha^q| \doteq \frac{1}{2} \left| \left(\frac{f''(\alpha)}{f'(\alpha)} + \frac{1-q}{\alpha} \right) q \alpha^{q-1} \right| (x_n - \alpha)^2$$

α が m 重根のとき $M=(1-1/m)|q\alpha^{q-1}| < 1$ なら次の 1 次収束をする.

$$|x_{n+1}^q - \alpha^q| \leq M |x_n - \alpha|$$

証明 $g(t) = f(t^{1/q}) = f(x)$, $x^q = t$ である. α が $f(x)=0$ の単根のとき, $t = \alpha^q$ は $g(t)=0$ の単根となる. このとき $g(t)$ に関するニュートン法は次の 2 次収束となる.

$$|t_{n+1} - \alpha^q| \doteq \frac{1}{2} \left| \frac{g''(\alpha^q)}{g'(\alpha^q)} \right| (t_n - \alpha^q)^2$$

ここで

$$\begin{aligned} g'(t) &= \frac{dg(t)}{dt} = \frac{df(x)}{dx} \frac{dx}{dt} = f'(x) \frac{1}{qx^{q-1}}, \\ g''(t) &= \frac{d^2g(t)}{dt^2} = \frac{df'(x)}{dx} \frac{1}{qx^{q-1}} + f'(x) \frac{d}{dt} \frac{1}{qx^{q-1}} \\ &= f''(x) \frac{1}{q^2} \frac{1}{x^{2q-2}} - f'(x) \left(\frac{q-1}{q^2} \frac{1}{x^{2q-1}} \right) \end{aligned}$$

となる. また

$$(t_n - \alpha^q) = (x_n^q - \alpha^q) = (x_n^{q-1} + x_n^{q-2}\alpha + \dots + x_n\alpha^{q-2} + \alpha^{q-1})(x_n - \alpha)$$

と因数分解されるから, 最初の式は

$$|x_{n+1}^q - \alpha^q| \doteq \frac{1}{2} \left| \frac{f''(\alpha) \frac{1}{q^2} \frac{1}{\alpha^{2q-2}} - f'(\alpha) \left(\frac{q-1}{q^2} \frac{1}{\alpha^{2q-1}} \right)}{f'(\alpha) \frac{1}{q\alpha^{q-1}}} \right| (x_n^{q-1} + x_n^{q-2}\alpha + \dots + x_n\alpha^{q-2} + \alpha^{q-1})^2 (x_n - \alpha)^2$$

となる. ここで $x_n \doteq \alpha$ とおくことにより定理の前半の式を得る.

α が $f(x)=0$ の m 重根のとき, $f(x)$ に関するニュートン法は次の 1 次収束をする.

$$|x_{n+1} - \alpha| \leq \left(1 - \frac{1}{m} \right) |x_n - \alpha|$$

これを $g(t)$ に関するニュートン法の 1 次収束に適用して後半の式を得る。 \square

定理 5 の 2 次収束の式からニュートン法と TH 法の収束の速さを比較する十分条件を与える。

定理 6
$$0 \leq \frac{f'(\alpha)q-1}{f''(\alpha)\alpha} \leq 2$$

を満たす整数 q が存在すれば、 q 乗の TH 法がニュートン法より収束が速いか等しい。

証明 定理の式を式変形すると

$$-1 \leq 1 + \frac{f'(\alpha)1-q}{f''(\alpha)\alpha} \leq 1$$

となる。ここで $|q\alpha^{q-1}| \geq 1$ のとき、 $1/|q\alpha^{q-1}| \leq 1$ であるから

$$-\frac{1}{|q\alpha^{q-1}|} \leq 1 + \frac{f'(\alpha)1-q}{f''(\alpha)\alpha} \leq \frac{1}{|q\alpha^{q-1}|}$$

の範囲が得られる。これより

$$\left| \left(\frac{f''(\alpha)}{2f'(\alpha)} + \frac{1-q}{2\alpha} \right) q\alpha^{q-1} \right| \leq \left| \frac{f''(\alpha)}{2f'(\alpha)} \right|$$

を得る。これは TH 法が N 法より収束が速いか等しいことを示している。

$|q\alpha^{q-1}| \leq 1$ のとき、証明の最初の式より

$$-1 \leq \left(1 + \frac{f'(\alpha)1-q}{f''(\alpha)\alpha} \right) |q\alpha^{q-1}| \leq 1$$

を得る。これより 2 つ上の不等式が得られる。 \square

これまで調べた代数方程式の 3 つ例に対して、 $q=2$ のときに上の条件を満たし、 TH 法がニュートン法より収束が速い結果が得られている。

例 2 $x = \varphi(u) = e^u$ とおくと、 $u = \varphi^{-1}(x) = \log x$ 、 $y = g(u) = f(\varphi(u)) = f(e^u) = f(x)$ となる。拡張ニュートン法は

$$u_{k+1} = u_k - \varphi'(u_k)^{-1} \frac{f(x_k)}{f'(x_k)}, \quad \varphi'(u)^{-1} = \frac{du}{dx}$$

$$\log x_{k+1} = \log x_k - \frac{1}{x_k} \frac{f(x_k)}{f'(x_k)}$$

$$x_{k+1} = e^{\log x_k - \frac{1}{x_k} \frac{f(x_k)}{f'(x_k)}}$$

となり, 漸化式

$$x_{k+1} = x_k e^{-\frac{1}{x_k} \frac{f(x_k)}{f'(x_k)}}$$

を得る.

$f(\alpha)=0$ とすると $e^u = \alpha$, $u = \log \alpha$ となり

$$g(\log \alpha) = f(\varphi(\log \alpha)) = f(e^{\log \alpha}) = f(\alpha) = 0$$

となる. 漸化式 u_k は $\log \alpha$ が単根のとき次の2次収束をする.

$$u_{k+1} - \log \alpha \doteq \frac{g''(\log \alpha)}{2g'(\log \alpha)} (u_k - \log \alpha)^2$$

これを x_k に書き直すと次式になる.

$$\frac{x_{k+1}}{\alpha} \doteq \left(\frac{x_k}{\alpha} \right)^{\frac{1}{2} \left(\frac{f''(\alpha)\alpha + 1}{f'(\alpha)} \right) \log \left(\frac{x_k}{\alpha} \right)}$$

漸化式 u_k は $\log \alpha$ が m 重根のとき次の1次収束をする.

$$u_{k+1} - \log \alpha \doteq \left(1 - \frac{1}{m} \right) (u_k - \log \alpha)$$

これを x_k に書き直すと次式になる.

$$\frac{x_{k+1}}{\alpha} \doteq \left(\frac{x_k}{\alpha} \right)^{1 - \frac{1}{m}}$$

したがって次の定理を得る.

定理 7 $x = \varphi(u) = e^u$ から得られる拡張ニュートン法

$$x_{k+1} = x_k e^{-\frac{1}{x_k} \frac{f(x_k)}{f'(x_k)}}$$

は, α が単根のとき次の指数収束をする.

$$\frac{x_{k+1}}{\alpha} \doteq \left(\frac{x_k}{\alpha} \right)^{\frac{1}{2} \left(\frac{f''(\alpha)\alpha + 1}{f'(\alpha)} \right) \log \left(\frac{x_k}{\alpha} \right)}$$

α が m 重根のとき次の指数収束をする.

$$\frac{x_{k+1}}{\alpha} \doteq \left(\frac{x_k}{\alpha} \right)^{1 - \frac{1}{m}}$$

定理7の指数収束とニュートン法の2次収束の比較条件は現在のところ得られない。そこでパソコンを使い、 $x_{k+1}=x_k e^{-\frac{1}{x_k} \frac{f(x_k)}{f'(x_k)}}$ とニュートン法の数値計算を行い、両者の収束の速さを比較する。方程式は村瀬義益『算法勿憚改』(1673)にある炉縁の方程式

$$f(x)=x^3-14x^2+48=0$$

を用いる。根は $2, 6 \pm 2\sqrt{3}$ である。

数値計算はExcelで行い、標準10桁で出力する。

以下に初期値を-2, 1.5, 10としたときの数値計算の3組(6つ)の表を与える。初期値が-2のときは、両者の反復回数は4回で同じである。初期値が1.5のときは、ニュートン法は4回であるが、拡張ニュートン法は5回である。初期値が10のときは、ニュートン法は8回であるが、拡張ニュートン法は11回である。

$x = \phi(u) = \exp(u)$ $f(x) = x^3 - 14x^2 + 48 = 0$

	x_k	$(1/x_k)f(x_k)/f'(x_k)$	x_{k+1}
0	-2	0.117647059	-1.778019531
1	-1.778019531	0.01783909	-1.746582518
2	-1.746582518	0.000352517	-1.745966927
3	-1.745966927	1.3413E-07	-1.745966692
4	-1.745966692	1.94953E-14	-1.745966692
5	-1.745966692	-1.40254E-16	-1.745966692
6	-1.745966692	2.10381E-16	-1.745966692
7	-1.745966692	-1.40254E-16	-1.745966692
8	-1.745966692	2.10381E-16	-1.745966692
9	-1.745966692	-1.40254E-16	-1.745966692
10	-1.745966692	2.10381E-16	-1.745966692

ニュートン法 $f(x) = x^3 - 14x^2 + 48 = 0$

	x_k	$f(x_k)/f'(x_k)$	x_{k+1}
0	-2	-0.235294118	-1.764705882
1	-1.764705882	-0.018623987	-1.746081896
2	-1.746081896	-0.000115199	-1.745966697
3	-1.745966697	-4.39936E-09	-1.745966692
4	-1.745966692	-1.22439E-16	-1.745966692
5	-1.745966692	2.44879E-16	-1.745966692
6	-1.745966692	-1.22439E-16	-1.745966692
7	-1.745966692	2.44879E-16	-1.745966692
8	-1.745966692	-1.22439E-16	-1.745966692
9	-1.745966692	2.44879E-16	-1.745966692
10	-1.745966692	-1.22439E-16	-1.745966692

$x = \phi(u) = \exp(u)$ $f(x) = x^3 - 14x^2 + 48 = 0$

	x_k	$(1/x_k)f(x_k)/f'(x_k)$	x_{k+1}
0	1.5	-0.375886525	2.184422809
1	2.184422809	0.081890125	2.01266861
2	2.01266861	0.006280047	2.000068561
3	2.000068561	3.42789E-05	2.00000002
4	2.00000002	1.01485E-09	2
5	2	0	2
6	2	0	2
7	2	0	2
8	2	0	2
9	2	0	2
10	2	0	2

ニュートン法 $f(x) = x^3 - 14x^2 + 48 = 0$

	x_k	$f(x_k)/f'(x_k)$	x_{k+1}
0	1.5	-0.563829787	2.063829787
1	2.063829787	0.063117179	2.000712608
2	2.000712608	0.000712516	2.000000092
3	2.000000092	9.22888E-08	2
4	2	1.2919E-15	2
5	2	0	2
6	2	0	2
7	2	0	2
8	2	0	2
9	2	0	2
10	2	0	2

$x = \phi(u) = \exp(u)$ $f(x) = x^3 - 14x^2 + 48 = 0$

	x_k	$(1/x_k)f(x_k)/f'(x_k)$	x_{k+1}
0	10	-1.76	58.12437394
1	58.12437394	0.301548407	42.99297311
2	42.99297311	0.287376234	32.25459301
3	32.25459301	0.26613911	24.7177434
4	24.7177434	0.233923116	19.56218227
5	19.56218227	0.185345514	16.25259703
6	16.25259703	0.117272309	14.45413314
7	14.45413314	0.044516744	13.82479419
8	13.82479419	0.005635792	13.74709967
9	13.74709967	8.24017E-05	13.74596693
10	13.74596693	1.73696E-08	13.74596669

ニュートン法 $f(x) = x^3 - 14x^2 + 48 = 0$

	x_k	$f(x_k)/f'(x_k)$	x_{k+1}
0	10	-17.6	27.6
1	27.6	6.881370993	20.71862901
2	20.71862901	4.143283919	16.57534509
3	16.57534509	2.09808648	14.47725861
4	14.47725861	0.66259005	13.81466856
5	13.81466856	0.068006157	13.7466624
6	13.7466624	0.000695635	13.74596676
7	13.74596676	7.24377E-08	13.74596669
8	13.74596669	0	13.74596669
9	13.74596669	0	13.74596669
10	13.74596669	0	13.74596669

例3 $x = \varphi(u) = \sin^{-1}u$ とおくと, $u = \varphi^{-1}(x) = \sin x$ であり,

$$y = g(u) = f(\varphi(u)) = f(\sin^{-1}u) = f(x)$$

となる. 拡張ニュートン法は

$$u_{k+1} = u_k - \varphi'(u_k)^{-1} \frac{f(x_k)}{f'(x_k)}, \quad \varphi'(u)^{-1} = \frac{du}{dx} = \cos x$$

$$\sin x_{k+1} = \sin x_k - \cos x_k \frac{f(x_k)}{f'(x_k)}$$

となる. しかし $-1 \leq \sin x_{k+1} \leq 1$ でなければならないので, このような範囲でしか使用できない.

例1～例3でみたように関数 $x = \varphi(u)$ の選び方が問題になる.

謝辞 元金沢学院大学教授 林 有一氏からご教示を頂きました. ここに厚く御礼申し上げます.

参考文献

- [1] 堀口俊二：ニュートン法の一般化, 日本数学会 2012 年度年会 3 月, 応用数学科会講演アブストラクト, pp. 85-87.
- [2] 堀口俊二：村瀬義益・ニュートン型の拡張漸化式(土倉・堀口法)の数値計算と収束比較条件式, 京都大学数理解析研究所講究録 1787, 2012 年 4 月, pp. 254-264.
- [3] 林 有一：算法勿憚改の反復法について, 第 36 回応用数学研究集会(福岡教育大学), 2011 年 8 月 27 日
- [4] 村瀬義益著・西田知己校注：『算法勿憚改』(1673), 研成社, 1993
- [5] 鈴木武雄：『和算の成立』, 恒星社厚生閣, 2004
- [6] 永坂秀子：『計算機と数値計算』, 朝倉書店, 1980
- [7] 戸川隼人：『数値計算法』, コロナ社, 1981
- [8] 山本哲朗：『数値解析入門[増訂版]』, サイエンス社, 1976
- [9] 森正武・室田一雄・杉原正顕：『数値計算の基礎』, 岩波書店, 1993

Generalization of Newton's method

Shunji HORIGUCHI

2013年2月

新潟産業大学経済学部紀要 第41号別刷

BULLETIN OF NIIGATA SANGYO UNIVERSITY
FACULTY OF ECONOMICS

No.41 February 2013